

# 『メイストーム』

霧夜真魚(きりやまお)

9246 文字

## 【あらすじ】

高級老人ホームで孫に成りすまし被害総額五十億円というオレオレ詐欺を働いた身元不詳の少年を現行犯逮捕するため、刑事の片瀬は清掃員として老人ホームに潜伏した。偽の孫だと知りつつ受け入れる孤独な老婦人と容疑者の少年との交流から、片瀬は詐欺事件の根幹にあるものを探り出していく。

「おばあちゃん、みかんゼリー好きだったろ？今日、たくさん買ってきたから食べてよ」

「ありがとう。健治もお食べ」

「うん。あ、ほら、俺がやるから貸して」

健治はそう言って、八重子の手からゼリーをとるとビニールの蓋を簡単に剥がす。そんな当たり前のことができなくなったのはいつだったかしら。覚えていないからだいぶ前だろう。終の住処、介護付き超高級老人ホーム『グランドパレス』に入所して三か月になる。息子夫婦は一度として来ないが、孫の健治が近くの大学に進学したといって今春から訪れるようになった。

「はい」スプーンと共にゼリーを差し出す。

「ありがとう」

「これ食べたら散歩しようぜ。今日、天気良いからさ」

「そうだね」

窓外を見やる。桜は散ったけれど、八重子の心は明るかった。若者がいるだけでこうも華やぐのか。自分まで若返った気になる。しかし歩けなくなった足は筋肉も贅肉も削げて棒切れのようだし、血管が浮き出た手の甲は根の張った地面みたいで、どこに目を向けても九十の老婆にちがいない。

「失礼します」

清掃員の片瀬が小型スーパーを持って入ってきた。起動させると慣れない手つきで押して行く。それを見た健治が「行こうか」と介護ベッド脇に車椅子をつけ、上手に八重子を移動させる。すれ違い際に、どう見てもスーパーに踊らされている片瀬に「ご苦労様です」八重子が挨拶すると、鋭い目つきを隠すように帽子の縁に手をやり「どうも」と愛想のない返事をした。

部屋を出て暫くすると、突然、車椅子が止まる。

「どうしたの？」「忘れ物。ちょっと待ってて」

健治が八重子の部屋に駆け込むと、片瀬が慌ててスーパーを持ち、掃除を始める。

「あんた、本当に清掃員？」健治が片瀬を睨む。ギクっとなるが答えずにいると、

「前来たときと同じ所が汚れんだよ」と、部屋の隅の綿埃や毛足の長い絨毯に埋もれたゴミ、汚れた窓ガラスを指し「ここって、すげえ高いんだろ？だったらちゃんときれいにしてよ。あんただって不潔な所で生活したくねえだろ？」

「気をつけます」ぼそっと答えると、健治は舌打ちして棚上にある八重子の膝掛けを持って出て行った。ふうとため息をつく。バレたかとヒヤヒヤした。片瀬は刑事だ。先月、超高級老人ホーム『プレミアムパレス』で孫に成りすました特殊詐欺事件があった。入所金が一億円、介護付きとあって家族と疎遠の居住者も少なくない。孫だと名乗られ優しくされたら簡単に騙される。『プレミアムパレス』では入居者四十名全員が引っかけ被害総額五十億円を超えた。被害者の情報から似顔絵を作成し、近隣の富裕層をターゲットにした老人ホームに配った所、似た人物がいると同グループの運営事業者である石橋建設社長の石橋から通報を受けた。それが健治だ。早速、八重子の息子夫婦に確認した所、案の定、八重子の孫だと名乗る健治は偽者だと判明。すぐに逮捕することもできたが、オレオレ詐欺はグループ犯罪だ。全員逮捕しなければ同様の詐欺が繰り返されると、偽健治を泳がせることになった。といえは聞こえがいいが、実は彼が犯人という決め手がない。ならば現行犯逮捕だ！との勢いで、片瀬は一週間前から清掃員としてこのホームに潜り込んでいる。

「ほほほ」窓外から八重子と健治の笑い声が聞こえる。一見すると実の孫と祖母のようだ。心から楽しそうな八重子の笑顔に複雑な思いを抱く。実の息子は八重子の元に詐欺の容疑者がいると知っているのに、案じるどころかこちらに任せきりで訪ねてこない。体裁を保つために高級老人ホームに入れたらそれで息子の役割は終わりと言わんばかりだ。そもそも入所金は八重子の夫の遺産から支払われている。

健治が『グランドパレス』を出ると、片瀬はすぐ八重子に確認する。

「何か聞かれたり、頼まれたりしましたか」

「ええ。若い頃のことを。私ね、バレエを習っていたんですよ。当時は珍しがられて。チュチュを着た姿がお人形さんみたいって近所からも評判で……」

「そういうことじゃなくて、財産とか個人情報とか金銭絡みのことですよ！」

思わず声を荒げる片瀬に、一瞬にして花がっぼむように八重子から笑顔が消える。

「そういったことは一切、聞かれませんか」と、顔をそむける。

「八重子さん、やつはオレオレ詐欺の容疑者なんです。あなたや他の居住者の財産を守るために私はここにいるんです。今は優しい孫を演じていますが、いつ牙を剥くか分かりません。『プレミアムパレス』で彼が働いた詐欺のこと聞いてるでしょう？」

八重子は興味がないのか乗ってこない。引っ込みがつかなくなり、

「全員ひっかけて被害総額 50 億円！全員の財産を騙しとった卑劣な奴なんです！」

と、握りしめたモップを上下に揺らして熱弁する。

「あらモップの扱いが上手くなりましたね」八重子に嫌味で返され、片瀬は持っていたモップを壁に立てかけた。八重子はふっと口元に微笑みを浮かべ、

「きっと騙された方たちも私のように楽しんだんでしょね。詐欺だろうが誰かが訪ねてくるといのは嬉しいものです」

それは違うだろとツッコミを入れたくなるが、こうも穏やかに言われると何も返せない。

「とにかく、八重子さんの個人情報など聞き出そうとしたら、引っかかった振りしてくださいね。あ、でも教えないように」

「引っかかる振りねえ。でもすごい詐欺師なんでしょう？ 健治は。振りなんてすぐ分かるんじゃないかしら。あなたのことだって見破っているかもしれませんよ」

「え？」ドキッとした。

「それ、スーパーっていうんですって？ 扱い方をちっとも知らない、窓拭きはおろか雑巾がけすら出来てないって健治がこぼしています。片瀬さんこそ気をつけないと刑事だってバレますよ」

ぐうの音も出ない。健治に疑われたら元も子もない。

「それに……確かに健治は私の孫ではないけれど、だからといって犯人とは限らないわ。確実な証拠はないんでしょう？」

「だったらなんで八重子さんの所に毎日通うんですか」

「さあ。それを見つけるのは刑事さんのお仕事ですわね」オホホと笑う。

ムツとして俯くと、毛足の長い絨毯に絡まったゴミが目に入った。さっと窓ガラスを見ると確かに汚れている。「あんただって不潔な所で生活したくねえだろ」健治の声がよぎる。口が達者だから忘れてしまうが、八重子は足が不自由な老人なのだ。思うように外出できない彼女にとって窓から眺める景色は気晴らしになる。それにベッドに横たわった目線の高さで立っている人とでは全く違う。床により近いのだから、絨毯のゴミだって目につく。片瀬のせいで汚れてしまっただけで気も滅入るだろう。雑巾掛けすら知らない、か。その通りだ。掃除は妻に任せっきり。年末の大掃除だって仕事で家を空けていることが多いからしたことがない。片瀬はスーパーを起動させ掃除を始めた。が、毛足の間に絡まったゴミはなかなか取れない。くそっ！ 今度は力を入れすぎてスーパーが持ち上がり、その場に尻餅をついてしまった。八重子が笑いをかみ殺しているのが視界に入る。「だ、大丈夫です。ちゃんとできますから」

誰にというわけではないが片瀬はそう言ってみた……ものの、どうしていいかわからない。困った。掃除なんて簡単だと甘く見ていた。

『グランドパレス』は超高級老人ホームとうたっているだけあって、八重子の二百平米ある部屋はヨーロッパの五つ星ホテルのように豪華だ。廊下の突き当たりにある寝

室は和室で床の間はもちろん小さな庭園まで付いており、隣の洋室は床が大理石の書斎、その隣はロココ調の趣味の部屋。広いリビングの天井にはきらびやかなシャンデリアがぶら下がり、刺繍を施した四人掛けソファが中央に置かれ、出窓に面して介護ベッドが置かれている。リビングは絨毯、ダイニングはフローリング、書斎は大理石。片瀬の持つスイーパーはどの床もこれ一つで清掃できる優れものらしいが熟練したコツが入る。健治に指摘された所だけでもキレイにしないと疑われる。清掃員ではないと見破られたら即刻引き上げるだろう。

捜査員の田中から電話が入り、別室へ移る。健治を尾行していたが見失ったとい、これから『プレミアムパレス』へ聞き込みに行くと電話が切れた。深い溜息をつく。健治の所持品からは身元を特定できる物は何一つ出てこない。携帯電話すら持っていないのだ。『プレミアムパレス』で彼のものらしき指紋は検出されたが、犯罪歴がないからかデータに引っかからない。張り込んで一週間経つのに健治は身元不詳のままだ。

リビングに戻り、「今度やつが来たらどこに住んでいるのか、友達はあるのかそれとなく聞いてくれませんか」と、片瀬は八重子に頼んだ。

「いいですよ。でも、女友達と隣町のマンションに住んでいるって聞きましたけど。『ドリーム』とかいう名前のマンションで、駅から徒歩一分ですって」

片瀬は驚いて目を丸くし、「そんな重要なこと聞いたらすぐ教えてくださいよ！」

「だって財産絡み以外のことを話そうとするとすぐ遮るじゃありませんか」

オホホと笑う。片瀬はすぐ田中に確かめるように連絡した。

「片瀬さん」「まだ何か知っているんですか！」身を乗り出すと、

「いいえ。私、これからフラダンス教室なの。その間に、窓だけでもきれいにしておいてくださいな。バレないためにも」

いつの間にか八重子はアロハのワンピースに着替え、カラフルなレイを首に、ハイビスカスを耳にかけ、ばっちりメイクをして電動車椅子で部屋を後にした。

「……窓ならできる。窓磨きならできるぞ！」

片瀬は気合を入れて物置から窓ガラス用クリーナーを数本、スポンジ、水切りワイパーを取り出した。窓ガラスに洗剤を吹き付け、スポンジでこすり、ワイパーで拭きとれば、あら不思議、ピッカピカ！のはずが……きれいになっていない。

「な、なんでだ……」愕然としていると「本当に清掃員？」背後から声をかけられる。怪訝そうに見る健治に片瀬は「実は清掃員、初めてなんだ。経験者しかとらないって言われたんで嘘ついて。クビになると困る」と、一か八か演じて見た。すると健治の表情

が変わる。「しょうがねえな」そういうと片瀬の手から洗剤を奪い、裏のラベルをチェックしながら「あのさ、汚れて色々あるんだよ。水垢だけじゃなくて油とか。まず用途からどの洗剤を使うか見極めねえとだろ。ワイパーだって力強く拭きゃいいってもんじゃねえよ」

健治は別の洗剤を窓ガラスに吹き付けると、手際よくワイパーで拭き取った。あっという間に鏡のような窓ガラスになる。「……うまいな」感心して片瀬が言う。

「やってたからね」「清掃員を？」「施設にいたんだ。だから掃除は得意だ」「施設？」健治は慌てて「ボランティア。児童養護施設で掃除してたんだ」動揺する健治に気づかない振りして「偉いな。子供がたくさんいると掃除してもすぐ汚れるから大変だろう。うちも小さいのが二人いるから分かるよ」話を合わせると健治はほっとしたのか「小さい子ってどこでも落書きするだろ？壁とか廊下とか。しかもクレヨンや油性マジックでさ。でも怒れないじゃん？それが子供なんだから。職員に見つかりと殴られるっていうから必死に落としてやったよ」

健治の表情からは作り話に聞こえない。ボランティアではなく実際に施設にいたのではないか。「もっと教えてくれよ」片瀬が言うと警戒して黙ってしまった。

「あ、いや、掃除のこと。クビにならないためにも。上手だからさ」

「いいよ」

親に褒められた子どものようににはにかむ。その純粋な瞳に悪い奴じゃないのかもしれないと思ってしまった。

健治はスーパーの使い方、雑巾がけなど掃除の基礎的なことを教えてくれた。

手際の悪い片瀬に呆れ「家の掃除、誰がやってんの？」

「妻だ。こんなに大変だと思わなかったよ。掃除なんて面倒くさいだけだ」

「贅沢だなあ。掃除できる家があるなんて最高じゃねえか。それを面倒くせえなんて」片瀬は驚いた。そんな風に考えたことは一度もなかった。健治には家がないのだろうかと考え、ほっとした。もしやと思ったところへ八重子が戻ってくる。部屋を見渡し、「まあ随分と部屋が明るくなったわ」嬉しそうに両手を合わせ、「お礼にご馳走させていただきますいな。みんなでお部屋で食べましょう。何が食べたい？」

「牛丼！」健治が即答する。「片瀬さんは？」「でも……」「遠慮なさらずに」

「じゃあ、私も牛丼で」「男の人って牛丼がお好きなのねえ。私もそれにしましょう」八重子は弾んだ声でインターホンで注文する。すぐ良いにおいを漂わせて牛丼が運ばれてくる。食卓に三人分の牛丼、味噌汁と漬物が湯気をたてて並ぶ。

「すげえ！大盛りじゃん！最高にうめえよ！」健治ががつついて食べ、片瀬も「いただきます」と一口食べて驚く。美味しい。特にご飯が。

「ここはね炊飯器じゃなくて、お釜で炊くんですよ。だからお米本来の美味しさが出るの。子供の頃と同じ炊き方だから懐かしくて」

「こんなうまいもん、子供の頃から食ってたんだ。いいなあ」

「お母さん、食事作らないのか？」片瀬が聞くと、健治がむせた。

「働いているんだもの。そんな余裕ありませんよ」

健治を庇ったのか、嫁の愚痴なのか八重子が代わりに答えたため、健治の素顔に迫れなかった。

突然、雷が鳴り、叩きつけるように雨が降りだし、暴風が吹き荒れる。

『メイストーム』ね」八重子が窓外を見て言った。

「何それ？」口にたっぷりご飯を含んで健治が聞く。

「この時期に来る台風のこと。『春の嵐』とも呼ばれているの」

桜の花びらが強風に踊らされ、竜巻のように夜空へ舞い上がっていく。稲光が走り、地響きとともに雷鳴が近くです。あっという間にどしゃぶりになった。

やれやれ、これじゃ外での張り込みは厳しいなと片瀬は深い溜息をつく。

「健治も片瀬さんも、外に出るのは危険ですから泊まっていきなさいな。私はリビングで寝ますから。お二人は寝室を使って、ね」しかし……」片瀬が言うと、

「これじゃ電車もバスも動きませんよ。それにこんな嵐の中どうやって歩くんですか」

窓外に桜の木がしなるほどの強風が見える。片瀬は健治の反応を伺った。

「ばあちゃん、俺らのこと心配してるみてえに言ってるけど本当は一人が怖いんだろ」

「オホホ。実はそうなの」

「いいよ。泊まるよ。あんたも泊まるだろう？」

健治に聞かれ、曖昧にしていると頭に冷たいものが落ちてきて天井を見上げた。

雨漏りだ。天井がミシミシいやな音をたてる。三人は息を呑んで、音のする方を見る。

天井の水シミがダイニングからリビングへと走ってき、シャンデリアの上で止った。すると、そこで水シミがじわじわと広がり……ガッシャーン！凄まじい音を立て、シャンデリアが絨毯に落ちる。同時に天井に入った亀裂から滝のように雨が流れ出してきた。三人は口をぽかんと開けたまま、固まる。

「ヤベえ！」

健治が立ち上がりドアへ駆けていくのを片瀬がさっと追いかけて、肩を掴もうとすると、

「やっぱり同じだ！ドアが開かねえ」ドアノブをガチャガチャ回し、どんどん叩く。片瀬が眉間にしわを寄せ、「同じって何と同じなんだ？」と問うと、

『プレミアムパレス』だよ！」と叫ぶ。

やっぱり！健治は詐欺犯だ！早合点する片瀬に、

「ここもあそこと同じで欠陥住宅なんだよ！」と片瀬に訴える。

「へ？」マヌケな声を出す片瀬に、八重子が穏やかにしかし強い口調で言う。

「ここはオール電化なのに、配線が良くないのか雨が降ると鍵が自動的にかかって開かなくなるの。インターホンもつながらなくなってしまうのよ」

言われて片瀬が受話器を取ると鈍い音がするだけで機能していない。しかし、欠陥住宅って何だ？八重子と健治を見ると、こちらの考えを察したように、

「絨毯を剥がせばわかるんじゃないかしら。どうせ使い物にならないし」

「だな。おっし、そっち持ってよ！俺、こっち持つから」

健治に促され、片瀬は絨毯の端を掴んで巻き上げていく。露わになった床に片瀬は驚愕した。「なんだこれは……」異臭を放った床板は虫食いのような穴が幾つもあり、白くなっている。腐った材木を床板に使ったのか。そこに雨が叩きつける。天井の雨漏りの道筋を目でたどると壁に行きついた。その壁を叩くと空洞のように軽い音がする。

片瀬は苦渋の表情で「奥の部屋を見てくる」と、寝室へ走り、畳を持ち上げた。そこに廃材やら鉄筋が放置されていた。

「これで入所金一億？まるで詐欺じゃないか」

口にした途端、はっとなる。今までの八重子との会話が走馬灯のように脳内を駆ける。

——詐欺被害に遭った入所者たちが健治を犯人だと言ったんですか？

——いいえ。健治を訴えたのはホームの運営事業者、石橋建設社長の石橋です。

——確かに、あの子は私の孫ではないけれど、だからって本当に犯人なんですか。

確実な証拠はないんでしょう？

——健治は隣町のマンションに女性と住んでいますよ。

高鳴る鼓動を抑え、携帯電話を取出し、田中に連絡した。

「片瀬さん、ちょうど電話をしようと思っていたんですよ。健治と住んでいた女性は松田洋子といって半年前から」

「例の高級老人ホームに入所してたんだろ？」片瀬が遮って言った。

「ええ。あいつが吐いたんですか」

「いや……彼女は詐欺の被害者か」

「それが松田洋子は石橋が詐欺被害を訴える二日前に亡くなっています」

「死因はなんだ」

「心臓発作になってますけど、遺族の同意なく火葬したと石橋は訴えられたみたいですね。それと偽健治と住んでいたマンションは松田洋子の持ちビルで、彼の写真を近

所に見せたら、確かに半年ぐらい前まで、つまり『プレミアムパレス』に入所するまでよく一緒にいたと証言が取れました。でも仲良さそうだから孫だと疑わなかったと。あ、もう一つ、松田洋子は岩井八重子と知り合いです。同じ老人会に入っていたらしく、『グランドパレス』を八重子に勧めたのは松田洋子らしいです」

「だろうな」

「え？何か分かったんですか？」

「また連絡する」

片瀬は電話を切ると間違いないと確信した。どうやら今回の詐欺事件、根本から見間違いしていた可能性がある。

リビングに戻ると、八重子と健治が片瀬を笑顔で迎えた。

「何かわかりましたか、片瀬……刑事さん」

「『プレミアムパレス』詐欺事件の犯人は……石橋なんですね」

「お見事です」言うや否や、穏やかだった八重子が今まで見たことのない悔しさ、切なさをひめた暗い表情になる。

「洋子さんは石橋に殺されたんです。心臓発作なんて嘘です。彼女の心臓は百回雷に打たれたって止まらないはずよ」

「松田洋子は『プレミアムパレス』が欠陥住宅だと気づいたんですね」

八重子は頷き、「それだけじゃありません。介護付きと言っても、免許を持った介護士はいないし、医者が常勤しているはずなのに……曲がったことの嫌いな方でしたから、石橋に直接問い正しに行って、そこで入所者のお金を着服しているのを知ってしまった……」

八重子の目に涙が浮かび、身体を震わせる。健治が八重子の話を引き継いだ。

「横領が見つかるのは時間の問題だったんだ。職員たちが給料の未払いで石橋を問い詰めていたから。洋子婆ちゃんを殺害して、石橋は焦った。誰かを犯人に仕立てようと企んだんだ。そこで目に付けたのがオレだ。オレは『プレミアムパレス』でもここでも石橋と会っている。ちょっと調べれば、オレが二人の孫じゃなくて身元不詳の怪しい奴だって分かる。だろ？」

片瀬はバツが悪そうに軽く頷いた。

「だから高級老人ホームを狙った詐欺事件をでっちあげて、オレを容疑者にした。身元不明の未成年が実の祖母でもねえのに二つの老人ホームに通ったら誰だって疑うからな」

「信じてもらえないのは私も同じ。九十歳のおばあさんがこんな話をいきなり警察にしたらボケ老人と笑われてしまうわ」

確かに人は色眼鏡をかけて見てしまう。身元不詳のチンピラみたいな少年と九十の老婆では分が悪い……片瀬は自戒を込めてそう思った。

「すぐ逮捕されるかと思ったら俺を泳がすっていうんでチャンスだと思った。その間にヒントを与えればバカな刑事じゃなきゃ真実に気づいてくれるんじゃないかって願いながらさ」

「……名前なんていうんだ？」

「ケンジだよ」

「ふざけんな」

「本当だって。木村憲司。憲法を司るって書く。おばあちゃんの孫と漢字が違う」

「木村憲司……十八歳なのか」

「十五。無職、住所なし、親無し……っていうか、親が届け出てねえから戸籍がねえ。なもんで身元不詳。親戚中たらい回しにされて、どこも満足に食事くれなくて学校も行かせてくれなくて。フラフラで倒れそうになってる時、洋子おばあちゃんと出遭ったんだ。食事くれて、寝床くれて、好きなだけいていいって。嬉しかったなあ」

「私達の年代はみんなそうしますよ。昔は、子どもは地域で育てたの。自分の子でなくても分け隔てなくね。愛情もうんとかけて。年寄りになってもそれは同じ。みんなで助け合って生きてきた……血のつながりなど関係なくね」と、憲司を見る。

憲司の目が潤んでいた。

「オレ、二人の婆ちゃんから、ずっと欲しかったものを貰ったんだ」

「欲しかったもの？」

「家族だよ」

片瀬はぐっと詰まった。

「それは私も同じ。憲司に遭わなかったら、心安らかにあの世へはいけなかったわ。本当の息子より、本当の孫よりよくしてくれて感謝でいっぱいなの」

二人は微笑み合った。

「それにしてもひどい部屋ねえ。こんな水浸しになっちゃって。片瀬さん、掃除してくださいませんか？上手になったって憲司に聞きましたよ」

「え！こ、これを、今からですか？」片瀬が素っ頓狂な声を上げる。

「冗談ですよ。いやねえ、片瀬さんは」

オホホと笑う。憲司も「騙されてやんの」と、おかしそうに笑った。

ムっとしつつも、八重子の上品な笑い声とそれを見守る憲司とも今日で最後かと思うと、片瀬は一抹の寂しさを感じた。

嵐の過ぎ去った朝は嘘のように晴れだった。

逮捕された石橋は横領も洋子殺害もすぐ自供した。なんでも洋子の霊が付きまとして怖かったと言う。五十億の金はすべて女に貢いだと言った。

『グランドパレス』は別の事業者によって引き継がれたが八重子は入所しなかった。憲司を養子にして、小さな一軒家で同居しているという。そこから中学に通っていると憲司から連絡が来た。

片瀬はといえば、妻に掃除を任せっきりだったことを猛省し、休日は窓ガラスを磨くことにしている。「誰だって不潔なところに住みたいくねえだろ？」今でも憲司の声が聞こえる。庭に出て、窓ガラスを磨いていると、

「あなた、窓磨いてくれるのは嬉しいんだけど、今晚、台風が近づいてるんですって」

『『メイストーム』』

「え？」

「この時期の台風のこと、『メイストーム』っていうんだ」

「そう。どうでもいいけど、窓ガラスじゃなくて、お風呂を掃除してよ」

「はいはい」

片瀬は掃除道具を手にとると、掃除できる家がある幸せをかみしめ風呂場へ向かった。

(完)